

教宣 せぶん

ぶれないことの大切さ

少し前「変わらなきゃ」というフレーズが流行しました。社会の急速な変化に、自らの価値感も見直して、時代の流れに合わせようという提案・考え方だったように思います。確かに旧態依然とした古い体質を見直し、新しい息吹を積極的に取り込んでいくことは必要です。

いま、「変わらなきゃ」の対語という意味ではないのですが、「ぶれないこと」という言葉が密かに脚光を浴びているような気がします。時代の流れがどうであれ、自分の初心や信念、スタイルを貫くこと、貫いた人に共感を覚える風潮が広がっています。

話しは変わりますが、先日行われた日本のサッカー・ワールドカップ第1戦のオーストラリア戦をご覧になりましたか？日本は前半のリードを守れず、1 - 3で敗れてしまいました。日本が逆転負けを喫したので、それほど大きく取り上げられませんでした。もし日本が1 - 0で逃げ切っていたとしたら、日本の幸運(?)な1点目について、「あれはキーパーチャージだ」「いや、そうじゃない」と、もっと大きな物議を醸していたのではないかと思います。オーストラリア側は「キーパーチャージだ。誤審だ」ということになりがちでしょうし、日本側は「ルールが変わっている。審判は正しい」となるでしょう。

主観が入ると物事をなかなか冷静には見られないのですが、こういう場面で「ぶれない」とはどういうことなのでしょう。日本のテレビ解説者に「あれはキーパーチャージではない」と断言した人がいました。しかし、その人は日本とオーストラリアの立場が変わっていたとしても「あれはキーパーチャージではない」と言い切れるのでしょうか。もし言い切れたとしたら、私はその人を「ぶれてない」と判断します。しかし、日本が不利な立場になるか、有利な立場になるかで、物の見方が変わってしまう人は「ぶれている」と感じます。この解説者がそうだとは言いませんが、自分の立場がどこにあるかで、物の見方や考え方、信念までもが変わってしまう人が、いまなんと多いことでしょう。「郷に入っては郷に従え」「所変われば品変わる」的な人たちがたくさんいるからこそ、逆に「ぶれない」人や「ぶれない」考え方が尊ばれるのかもしれない。

私はサッカーの専門家ではありませんが、点を取ったチームが日本であろうが、オーストラリアだろうが、あのプレーは「キーパーチャージ」だと思います。この号の「真意」・「主旨」、全損保に身を置く方ならわかりますよね。